



認定NPO法人 全国こども食堂支援センター



第二次中期計画 概要版

2023 - 2025年度

はじめに

計画は本来、無生物に対してのみ、有効である。料理にしる工作にしる、命を失った「食材」「木材」に対して、人は完成図をつくり、そこに至る手順を描き、その計画どおりに「材」を加工することができる。

それに対して、社会は生きている。働きかけても受け流されることもあり、予期せぬ反発を受けることもあり、また、手の及ばないところでいつの間にか状況が変化していることもある。社会に対する働きかけは、計画通りにはいかない。そのことを私たちは、すでに歴史から学んでいる。したがって、社会に対する働きかけについての計画は、すでに「失敗」が約束されている。それにもかかわらず、私たちが計画を立てるのは、生きている社会を制御できるかのような幻想にしがみつきたいからではなく、現在における〈未来への意思〉をピン留めしておきたいからである。2023年10月の時点で、私たちは今後3年間(正確には今後2年半)をこのように意思した。本計画はその証拠・記録である。

むすびえは、発足から丸5年を迎える。2018年の発足以来、常に社会に働きかけ続け、そして社会に働きかけられ続けてきた。2020年来のコロナ禍を持ち出すまでもなく、多くの出来事は、当然ながら、予期できぬものだった。作用と反作用の往復の中で、状況の先を読み、状況に働きかけながら、状況に裏切られ、状況への対応を強いられてきた。もっとも鍛えられたのは、状況対応力だったと言えるかもしれない。

それにもかかわらず、前回の第一次中期計画を読み返したとき、そこで記述されていた〈未来への意思〉は、今でも本質的に何も変わっていないことに気づく。場当たりに状況への対応を繰り返しながら、そこにある意思は今でも一貫している。それを一言でいえば、人間と社会への信頼である。ままたらなないことだらけの世の中だが、人々は、すべての人々が生きるに値すると感じられる世の中を創りたいと願い、それに向けて、自分のできることに着手している。うまく機能していないことも多いし、自分が見えている範囲で下した判断が誰かを混乱させることもある。その事実時に傷つきながらも、しかし人々はそれでもその歩みを止めない。そうした人々の一部がこども食堂に取組んでいる。その人々が私たちの同志であり、先達である。

こども食堂は、すべての人々が生きるに値すると感じられる世の中を創りたいと願う人々が、その〈未来への意思〉を現在にピン留めした一つの発現形態である。私たちはその願いに共鳴し、私たちの意思をそこに重ね、自身もそのムーブメントに参画するとともに、他者にも参画するように促す。その私たち自身の〈未来への意思〉を、ここに第二次中期計画として記録する。

私たちが共鳴したその願いに、より多くの人々が共鳴・共感してくれ、それがさらに参画へと進むことを願う。

むすびえ理事長・湯浅誠



総論

● 「節度ある介入」

人々は上述した社会の実現を求めており、それはむすびえなしでも十分に可能かもしれない。私たちは、頼まれもしない支援を勝手に行なっており、それは単なる「おせっかい」である。私たちに、余計なことをするなど言うこども食堂の人たちも大勢いる。

それでも私たちは、私たちの歩みを止めない。こども食堂の人たちが、頼まれもしないのにこども食堂を始め、こどもたち、地域の人たちにおせっかいを焼いているように、私たちも、私たちの責任において、誰かのためではなく自分自身のために、この社会の当事者として、自分が果たすべきと考えた責任を果たしていく。私たちが常に強く留意するのは、私たちの支援が「節度ある介入(お節介)」を踏み外していないか、というその一点である。

私たちはそのために自分で課したミッションがあり、そのミッションを最大限果たすために、以下の5項目をこれからの取組みの柱とした。

第0の柱〈つながるために 創造する〉

つながりを実感できる地域社会の実現を目的とした
インパクト重視の創造的な事業展開による社会のバージョンアップ

第1の柱〈行けるように ふやす〉

誰もが地域の居場所にアクセスできる社会の実現を目的とした
こども食堂等2万箇所の開設と運営支援

第2の柱〈地域でまわるように 伴走する〉

資源の地域内循環を促進するエコシステムの構築を目的とした
すべてのステークホルダーに対する伴走支援力の向上

第3の柱〈理解をえるために 価値を示す〉

こども食堂・こどもの居場所・地域の居場所に対する
理解と普及(あたりまえ化・インフラ化)を目的とした運営実態・価値の可視化と普及促進

第4の柱〈輝くように 運営する〉

人が輝く組織になることを目的とした
個人・組織双方を活性化させる意識と仕組みの構築

● なぜこの5項目なのか

なぜこの5項目が重要なのか。それは、「なぜ私たちはこども食堂を支援するのか」という前述した理由から説き起こすことができる。人々が現に支持し、広がっているこの取組みをさらに広げることが、日本の住民自治を再興し、人々のつながりを復活させ、日本社会のレジリエンスとウェルビーイングを高める方途だと述べた。それには何よりも万人がそのような地域交流拠点にアクセスでき、そこで人とのつながりを享受できる必要がある(第1の柱)。また、住民自治の取組みは人々が暮らす地域を主な対象としており、その活動は基本的に地域の人々の多様な参画(寄付、ボランティア等々)によって支えられることが望ましい(第2の柱)。そのような状態は、人々の広範な理解なしには実現不可能であり、そのためには「そういった場があると、自分たちにより影響がある」と納得してもらう必要がある(第3の柱)。むすびえは、それを可能なかぎり多面的に促せる組織でありたいし(第4の柱)、単により組織だというだけでなく、創造的な事業展開によって社会にインパクトを生み出していきたいと願っている(第0の柱)。

● 何が書かれていないか

また、何が書かれているかとともに、何が書かれていないかも重要である。たとえば第1の柱に「こども食堂の常設化」とは書かれていない。アクセスできる居場所が複数あって、一つでうまくいかなくなっても「他があるさ」と思えることがごきげんな暮らしには不可欠なので、一つひとつのこども食堂が開催頻度を増やすよりも、たくさんの居場所があることがより重要と考えているからである。また第2の柱では、伴走支援力の向上は「むすびえへの信頼感を高めるため」とは書いていない。伴走支援力を向上させる必要があるのは、むすびえにではなく、地域に各種の資源が向かうことを促す力量をむすびえが身につけるためである。一つの言葉の選択の裏には、数百の言葉の廃棄がある。どんな言葉が廃棄されているのかに考えを巡らすことも、この5項目が選択されている理由をより明確に理解してもらうための助けとなるだろう。

● 各項目の関係

各項目には、手段である項目が自己目的化しないように、目的が明記されている。また、各項目は相互に有機的に連関しており、ある項目の実現のためには別の項目の実現が必要になるといった関係性に立つ。たとえば第1の柱は、第3の柱によって理解が広がらなければ実現できない。同時に、第1の柱が実現することで、より一層のあたりまえ化を促す価値の提示が可能となるだろう。また、第2の柱を実現するために必要な伴走力は第3の柱による多様な価値の可視化や第4の柱による組織開発に裏付けられなければ獲得できないだろう。よって第1から第4の重要度は等価であり、順番は優劣を意味しない。その上で、それでも第一項目は他の項目を貫く傘、または包括的な下支えとしての基底的な意義を有するため、あえて「0」としてその特異性を明確にした。

以下、各項目を詳説して、私たちが精一杯行おうとしているおせっかいを示す。

各項目の主な取り組み

第0の柱〈つながるために 創造する〉

つながりを実感できる地域社会の実現を目的とした
インパクト重視の創造的な事業展開による社会のバージョンアップ

1. インパクトマネジメントに基づいた事業遂行
2. 新しい分野、新しい人材との積極的な協働による創造的な事業展開
3. 経営戦略(ピークアウト戦略)の策定

第1の柱〈行けるように ふやす〉

誰もが地域の居場所にアクセスできる社会の実現を目的とした
こども食堂等2万箇所の開設と運営支援

1. こども食堂の特徴と価値を捉えたこどもの居場所づくりとその先に向けた企画・構想
2. 自治会・寺社・保育園・飲食店等の多様な主体の参入促進
3. 自律的・分散的な社会構造を前提とし、地域の実情に応じたこども食堂 / 地域ネットワーク団体支援

第2の柱〈地域でまわるように 伴走する〉

資源の地域内循環を促進するエコシステムの構築を目的とした
すべてのステークホルダーに対する伴走支援力の向上

1. 現場から受容されるこども食堂および地域ネットワーク団体への伴走支援
2. 意図と目的を踏まえた企業・団体への伴走支援
3. 上記を実現し、総合力を高めるための内部メンバー同士の伴走支援

第3の柱〈理解をえるために 価値を示す〉

子ども食堂・子どもの居場所・地域の居場所に対する理解と普及（あたりまえ化・インフラ化）を目的とした
運営実態・価値の可視化と普及促進

1. 子ども食堂の基礎的なデータとエピソードによる運営実態の可視化
2. 子ども食堂・地域の居場所の価値の可視化
3. 成果を活用した子ども食堂の普及促進

第4の柱〈輝くように 運営する〉

人が輝く組織になることを目的とした
個人・組織双方を活性化させる意識と仕組みの構築

1. 人事・DX・財務戦略や制度の策定と実施体制構築
2. 向かうべき方向性への理解促進と多様な声を受け止める広報啓発
3. 集団的な経営体制への移行

私たちが子ども食堂を支援する目的や、各項目の目的や具体的な取り組みの詳細は、
「第二次中期計画（詳細版）」をご参照ください。